

# 『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―

荊 木 美 行

〈要旨〉『日本書紀』は『古事記』とならぶ貴重な古典として、古来、多くの研究者によって、その研究が進められてきた。そうした研究の成果は、校訂本・読み下し文・現代語訳の作成や注釈といった形で世に問われてきた。とりわけ、明治以降は、洋装本の普及と相俟って、『日本書紀』のテキストの出版が盛んにおこなわれ、昭和前期には複数のものが相次いで刊行され、大いに普及した。これらテキスト・注釈書の発行が記紀研究の進展と関係することは言うまでもない。小論は、明治以降に刊行された『日本書紀』の原文・読み下し文・現代語訳・注釈を網羅したリストで、これによって、近現代における『日本書紀』研究の歩みを俯瞰しようとしたものである。

〈キーワード〉『日本書紀』 神代卷 テキスト 注釈書 記紀研究

## はじめに

『日本書紀』は『古事記』とならぶ貴重な古典として、古来、多くの研究者によって、その研究が進められてきた。そうした研究の成果は、校訂本・読み下し文・現代語訳の作成や注釈といった形で世に問われてきた。とりわけ、明治以降は、洋装本の普及と相俟って、『日本書紀』のテキストの出版が盛んにおこなわれ、昭和前期には複数のものが相次いで刊行され、大いに普及した。記紀研究の進展がこうしたテキスト・注釈書の発行と関係があることは言うまでもない。

これらのなかには、飯田武郷の『日本書紀通釋』全六巻のように、明治三十五年から翌年にかけて刊行されたのを皮切りに昭和の末年まで、版元を変えつつ十数回に及ぶ出版・復刊のあった、息の長い注釈書もある。しかし、いつぼうでは、発行部数も少なく、短命に終わり、一般にはあまり知られていないものもある。それらがその後の研究に積極的に活かされたとは言いがたい。

ただ、書籍の普及と注釈書としての価値はかならずしも比例しないのであって、日の目をみなかつたテキストや注釈書にも採るべき点がある。われわれは、そうした労作の目配りも忘れてはならないのであって、これこそが、先学に対する表敬ではないかと思う。

小論は、筆者が備忘のために作成してきたノートによって『日本書紀』のテキストや注釈書を紹介したものである。忽卒の間にまとめたものゆえ、遺漏もあるが、ここに洩れたものがあればご教示たまわれれば幸いである。

## 【凡例】

一、小論では、明治以降に刊行された『日本書紀』の原文・読み下し文・現代語訳・注釈を網羅する。現代語訳のみものを注釈書として掲出することには異論もあるが、これも一種の注釈であるとの判断から掲げた。

一、執筆は幕末に溯るようなものでも、明治以降の刊行であれば掲出する（たとえば、鈴木重胤『日本書紀傳』など）。ぎやくに、明治以降の刊行でも、江戸時代の板本の重刊や補刻本は、原則として除外した。

一、明治以後の刊行にかかるものでも古写本の影印、古注釈の繙刻（河村秀根『書紀集解』全四巻〈臨川書店、昭和44年9月30日〉・吉澤義則編『未刊國文古註釋大系』第十二巻〈帝國教育会出版部、昭和13年6月20日〉や高野辰之『日本歌謡集成』巻一上古編〈東京堂出版、昭和35年8月25日〉）などは除外した。

一、排列は、原則として刊行年月日順にしたがった。複数巻に分冊されたものについては、最初の巻の発行年月日によって排列した。「出版」「発行」「発兌」などの表記は、なるべく原本の奥付によった。

一、『日本書紀』全体に記述が及ぶものを中心に掲げ（ただし、少なくとも一卷分の記載のあるものは、原則として採った）、歌謡の注釈は別に掲出した。

一、原則として単行本で刊行されたものに限ったが、一部雑誌掲載のものも採った。

一、編者（校注者・訳者もふくめ、表紙または奥付に名前のある人に限る。「××著」「□□編」「○○校注」などの表記は、原本にしたがう）↓書名↓発行所↓刊行年月日（日附のないものは月まで）↓概要の順で掲げる。四冊以上の分冊からなるものの刊行年次については、原則として最初と最後に発刊された巻のそれを示した。

一、とくに冊数の記載のないものは、一冊本である。

一、概要についてのコメントは、簡潔を旨とした。

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

一、再刊・復刊についての情報は、概要のところでは言及した。

一、索引のような工具類、あるいは研究書は掲出ししない。

一、三品彰英博士の『日本書紀朝鮮関係記事考證』上巻・下巻は、著者ご本人が注釈と認識しておられるので、それを尊重して掲出した。

一、小論の作成にあたっては、『皇學』第五卷第一・二・三号、第六卷第二号掲載の「神宮文庫及神宮皇學館所蔵『日本書紀』関係書目録」

(上)(中)(下)(続)(昭和十二年三・八・十二月、同十三年十月)を参照したが、歌謡の注釈を別に立項したのは、たまたま

方針が一致しただけである。なお、筆者は、榊原末一氏の執筆にかかる、この目録の原稿を所蔵しており、これに加えられる訂正等も併せて参照した。

一、国語読本・漢文読本・詔勅謹解のたぐい、さらには青少年少女向けの「神話伝説集」のたぐいは、このたびの目録からは除外した。

## 【全体にわたるもの】

■ 中山繁樹訓点

『神代卷』全二冊

同盟書房、明治6年8月発売

『日本書紀』巻第一・二神代巻の原文に返り点と訓読を施したもの。下巻奥書には「原刻 延宝四年丙辰八月 明治六年四月二刻」とある。上巻巻頭には明治6年10月の加茂御祖神社大宮司・権少教正岡本経春の序と、明治6年7月の中山繁樹の序がある。

■ 田中頼庸校訂

『校訂日本紀』一・二

校訂兼出版人田中頼庸・売捌所中田正朔、明治13年5月29日発行

『日本書紀』神代巻の校訂本。諸本を以て校合した結果を頭注の形で掲げる。和装本。

■ 伴信友校訂

『本朝六國史 日本書紀』全三冊

あかしちゅうしち  
赤志忠七、明治16年8月出版

和装本。『日本書紀』全文の校訂本。第一冊は巻第一〜七、第二冊は巻第八〜十九、第三冊は巻第二十〜三十を収録。のち昭和40年3月25日に郁文舎から他の五国史と合冊して縮刷版が刊行された。

■ 飯田武郷

『日本書紀通釋』

大八洲學會、明治22年8月23日〜明治28年10月11日発行

『日本書紀』全巻の注釈。寛文版本を底本とする原文を掲げ（別巻の「索引・歌文集」の口絵参照）、それに対して詳細な注釈を施したもの。全七十巻。大八洲學會出版の分は、明治22年8月23日出版の上篇之一から明治28年6月7日出版の上篇之七までと、中篇之一（明治22年10月11日）・二（明治22年11月11日）があるが、他は未確認。その後、洋装活字本全五巻（発売所明治

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

書院、明治35年1月23日〜明治36年1月31日発行) が刊行され、このとき索引(発売所明治書院・六合館、明治36年1月31日発行) が加わった。のち『再版日本書紀』の書名で再刊され(発売所明治書院・六合館、全五巻とも明治42年12月1日発行、ただし索引はなし)、さらに大鏡閣(大正11年12月15日〜大正12年4月20日、ただし索引はなし)、内外書籍(昭和5年、このときから索引に歌文が加わる)・畝傍書房(『増補正訓日本書紀通釋』と改題、全巻とも昭和15年11月20日発行、索引あり。昭和17年にも重版)と版元を変え再版、戦後も昭和56年9月20日に教育出版センターより第一〜第五・索引歌文集として全六巻同時に復刻(昭和60年3月10日にも同社から重版されたが、このとき索引歌文集を「第六」と改める)。

■ しきだとしはる  
敷田年治

『日本紀標註』全二十六卷(和装本)

小林林之助、明治24年12月6日発行

『日本書紀』全三十巻にわたる注釈書。明治に入ってから刊行された注釈書は本書を以て嚆矢となす。巻之一は目録・凡例・論説・假字之例・異音・古韻・天津日嗣之大御脈・舍人親王略伝・万那婆志良まなばしらからなる。以下、巻之二は神代上之上、巻之三是神代上之下、巻之四是神代下、巻之五是神武天皇、巻之六は綏靖天皇〜崇神天皇、巻之七は垂仁天皇、巻之八は景行天皇・成務天皇、巻之九は仲哀天皇・神功皇后、巻之十は応神天皇、巻之十一は仁徳天皇、巻之十二は履中天皇〜安康天皇、巻之十三は雄略天皇、巻之十四は清寧天皇〜武烈天皇、巻之十五は継体天皇〜宣化天皇、巻之十六は欽明天皇、巻之十七は敏達天皇〜崇峻天皇、巻之十八は推古天皇、巻之十九は舒明天皇・皇極天皇、巻之二十は孝徳天皇、巻之二十一は斉明天皇、巻之二十二は天智天皇、巻之二十三は天武天皇上、巻之二十四は天武天皇中、巻之二十五は天武天皇下、巻之二十六は持統天皇を扱う。

■ おおやしま  
大八洲學會校訂

『六國史校本』

大八洲學會、明治25年4月13日發行

『日本書紀』卷第十六までの校訂本。底本は寛文本本で、諸本によって校合する。奥附によれば、校訂者は飯田武郷・木村正辭。卷末に「凡例」「新校正日本書紀所拠諸本」と卷第十六までの「校異」を掲げる。続卷については不明。なお、『大八洲學會雜誌』卷之三十二（明治22年2月10日發行）には「六國史校正趣旨」「大八洲學會發行六國史購求豫約規則」が、また同誌卷之三十三（明治22年3月10日發行）には魚住長胤うおずみおさたね「六國史校本刊行ニ就テ所感ヲ述ブ」が掲載されており、這般の事情を知ることができる。

■ きしもしゅうどう おおみやそうし  
岸本宗道・大宮宗司校訂

『日本書紀 全』

東京堂、明治25年8月6日發行

『日本書紀』全文の校訂本。底本は寛文本本で諸本によつて校合。頭注の形で校異を記す。扉に「菊園舎藏版」とあり、奥附に印刷者近藤圭造、発兌所東京堂、大売捌博文館、関西発売元盛文館とある。巻頭に内藤耻叟ちそうの序あり。

■ 經濟雜誌社集

『國史大系』第壹卷

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

經濟雜誌社、明治30年2月28日発行

『日本書紀』全文の校訂本。「凡例」によれば、「本書は故文学博士小中村清矩大人が安政の頃内藤廣前の校本を以て異同を註されしものに拠りて寛文の板本（流布本）に標註を加へ傍ら日本紀通證書紀集解等二三の書を參攷して校訂せり」とある。大正4年1月26日、黑板勝美が再校訂したものが刊行される。

■井上頼圀、三崎民樹・氷室銑之輔・庄田哲夫述

『日本紀講義』上巻・下巻

水穗會、明治39年4月20日発行

前掲田中頼庸氏の『校訂日本紀』を原本とし、神代巻の原文を掲げ、ついで鈴木重胤『日本書紀傳』によって注釈を施す。『日本書紀傳』の活字本は、いまだ刊行されざる時期なれば、宮内省図書寮所蔵の献納本によったか。

■井上頼圀、三崎民樹・氷室銑之輔・庄田哲夫述

『日本紀講義』神代巻』

皇學書院、明治39年8月20日発行

前掲井上頼圀、三崎民樹・氷室銑之輔・庄田哲夫述『日本紀講義』上巻・下巻を合本したもの。

■鈴木重胤著・秋野庸彦校訂

『日本書紀傳』全七巻



皇典講究所國學院大學出版部（明治45年2月12日発行の第六巻からは皇典講究所國學院大學販売所）、明治43年5月28日～同44年7月30日発行（第五巻〈六・七巻は未刊か〉までが昭和18年11月30日から同19年9月25日にかけて會通社〈三・五巻は瑞穂出版〉より再版発行）

『日本書紀』神代上下の注釈書（未完）。原文と注釈から構成される。重胤が生前に執筆した三十巻を適宜分冊。一には一之巻～七之巻、二には八之巻～十二之巻、三には十三之巻～十七之巻、四には十八之巻～二十二之巻、五には二十三之巻～二十七之巻、六には二十八之巻・二十九之巻、七には二十九之巻（続き）～三十之巻を収録。

なお、『日本書紀傳』はのち樹下快淳編輯『鈴木重胤全集』第一～九（鈴木重胤先生学徳顕揚会、昭和12年11月30日～同15年11月20日）にも収録されている。

■飯田弟治訳・松本愛重校閲

『新譯日本書紀』

嵩山房、大正元年年8月15日発行

『日本書紀』全巻の読み下し文。訳者は、飯田武郷の子息で、武郷の校訂した蓬室本の訓法により読み下したもの。松本愛重氏が校閲。本居豊穎もとありじよかひの序あり。巻頭に「新譯日本書紀索引」を排す。

■島根県皇典講究分所編

『日本書紀 神代巻』

島根県皇典講究分所、大正4年7月10日発行

『日本書紀』神代巻の全文について読み下し文を掲げたもの。巻末に詳細な索引を附す。

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

■ 島根県皇典講究分所編

『日本書紀 神武卷より成務卷』

島根県皇典講究分所、大正6年6月15日発行

神武天皇紀〜成務天皇紀までの全文について読み下し文を掲げたもの。巻末に「日本書紀年表」と詳細な索引を附す。前掲『日本書紀 神代卷』の続篇。

■ 社会教育協會編纂

『勤王文庫 第二卷 教學篇(上)』

社会教育協會、大正8年10月5日発行

『日本書紀』神代卷の正文だけを読み下しにしたもの。「十七条憲法」「大化改新の詔の奉答」などを併載。昭和15年11月20日に改訂版発行。

■ 原訓者橘守部・纂註者加藤玄智<sup>げんち</sup>・解題者安藤正次

『世界聖典全集 神道 日本書紀神代卷全』

世界聖典全集刊行會、大正9年4月20日発行

『日本書紀』神代上下について、まず、「日本書紀神代卷本文」として橘守部の『稜威道別』の正文・旁訓によって書き下し文を作成。ついで、「日本書紀纂註」として、諸家の注釈を排列し、巻末に「日本書紀解題」を附す。注釈はいずれ

も明治以前のもので、編者の私見は交えていないが、書き下し文を採用している点を考慮し、ここに掲載する。

■ 植松<sup>やすし</sup>安編

『註假名の日本書紀』 上巻・下巻

大同館書店、上下巻とも大正9年9月5日発行

清水濱臣旧蔵本を底本とし、諸本を以て校合を加えたもの。適宜註解を施して、用語等を解説。上巻巻頭に植松氏の「假名日本書紀に就て」を排する。上巻は第一〜十五、下巻は巻第十六〜三十を収録。

■ 中山泰昌編輯

『校註日本文學大系第一巻』

國民圖書會社、昭和2年7月21日発行

植松安編輯担当。『日本書紀』巻一・二の読み下し文と頭注。「例言」には田中本・宮内省図書寮本・彰考館本・岩崎文庫本などを参照したとある。『古事記』・風土記。祝詞・宣命などを併載。巻頭に尾上八郎氏の執筆にかかる「解題」あり。昭和12年7月12日に普及版発行。

■ 佐伯有義編

『六國史巻一・二 日本書紀』

朝日新聞社、卷壹昭和3年12月30日、卷貳は昭和4年4月2日発行

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

『日本書紀』の全巻について原文と頭注を掲げる。巻壹は寛文版本を底本とする『日本書紀』校訂本のうち、巻第十五までを収録。巻貳は巻十六から三十までを収録。巻壹巻頭には「日本書紀解題」を排し、巻貳巻末には附録として「日本書紀所見宮都並山陵一覽」「天武天皇紀賜姓一覽」などを掲載。のち、昭和十五年三月二十二日（上巻）、昭和十五年五月二十五日（下巻）に増補版刊行。なお、『明治聖徳記念學會紀要』三八（昭和七年九月十日発行）掲載の佐伯有義「六国史の編修と古写本に就て」が掲載され、本書刊行の経緯について記されている。

■黒板勝美編

『訓讀 日本書紀』上・中・下

岩波書店、上巻昭和三年一月十五日発行、同十八年四月八日改版、中巻昭和六年三月五日発行、同十六年十二月十五日改版、下巻昭和七年十二月二十五日発行、同十九年二月二十日改版

『日本書紀』ほぼ全文の読み下し文（武烈天皇紀に一部抄略あり）。わずかではあるが注を附す。上巻は巻第一・二、中巻は巻三〜十七、下巻は巻第十九〜三十を収録。

■聖徳太子奉讃會

『推古天皇紀』

聖徳太子奉讃會、昭和三年四月十八日発行

前掲の植松安編『註假名の日本書紀』から巻第二十二を抄出したもの。

■ 武田祐吉編

『註校 日本文學類從 上代文學集』

博文館、昭和4年1月15日發行

『日本書紀』卷第一～三までの全文の読み下し文と、巻第五～二十七の抜粋の読み下し文と、かんたんな頭注を掲げる。  
『古事記』・風土記などの読み下し文も併載。

■ もずめ 物集高見編

『新註皇學叢書 第一卷』

廣文庫刊行会、昭和4年5月12日發行

『日本書紀』全巻の原文と頭注。原文の末尾に「日本書紀校異」「日本書紀校訂所據諸本解説」を附す。『古事記』『古語拾遺』や風土記を併載。

■ 正宗敦夫編纂・校訂

『日本古典全集第三期 日本書紀(原文)』上・下

日本古典全集刊行会、上巻昭和5年7月25日・下巻昭和5年12月25日發行

『日本書紀』全巻の原文について寛永版本の再刻本を底本とし、諸本により校訂を加えたもの。上巻は巻第1～18、下巻は巻第19～30を収録。

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

■ 田邊勝哉著

『日本書紀講義 神代卷』

帝國神祇學會出版部、昭和7年5月10日発行

『日本書紀』神代卷上下について、原文・訳読(読み下し文)・解釈の順で排列したもの。「解釈」は用語解を中心とする。

■ 正宗敦夫編纂・校訂

『日本古典全集第三期 日本書紀(訓讀)』上・下

日本古典全集刊行会、上巻昭和7年7月25日・下巻昭和8年5月20日発行

『日本古典全集第三期 日本書紀(原文)』上・下の訓読。上巻は巻第一〜十八、下巻は巻第十九〜三十を収録。

■ 堀江秀雄著

『校註 日本書紀 神代より神武天皇まで』

明治書院、昭和7年9月25日発行

『日本書紀』巻第一〜三(神代上下・神武天皇)について、原文・読み下し文・頭注を施す。

■ 武田祐吉訳

『文六國史』第一日本書紀上・第二日本書紀下

大岡山書店、第一は昭和7年10月5日、第二は昭和12年11月25日発行

『日本書紀』全文の読み下し文。扉には「武田祐吉・今泉義忠編」とあるが、本冊の担当は武田祐吉。のち、昭和63年12月15日に臨川書店より合冊し武田祐吉訳『訓日本書紀』として復刻。

■ 黑板勝美校訂・解説

『日本書紀精粹』

大日本教化図書株式会社、昭和8年12月26日発行

日本思想叢書第9輯として刊行されたもの。『日本書紀』全巻の記事を適宜抜萃し、注釈・読み下し文・口訳と丁寧な解説を施す。神代巻の「一書」は省略も多いが、『日本書紀』全体を俯瞰できるように配慮されている。

■ 藤澤衛彦編

『日本神話と傳説』

大洋社出版部、昭和9年1月20日発行

『古事記』『日本書紀』『今昔物語集』『日本靈異記』から抽出した神話・伝承を口訳したもの。神代の話は『古事記』に譲り、『日本書紀』は神武天皇紀以下にみえる伝承三十二項を選び、訳出。同じものが判型を変えて、昭和10年9月30日に趣味の教育普及會からも発売されているが、両者の関係は不明。なお、藤澤氏には他にも同様の編著が複数ある。

■ 黑板勝美訓読

『古事記  
日本書紀 崇神天皇御紀』

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

崇神天皇聖徳奉讃會、昭和9年11月12日発行

『古事記』崇神天皇段と『日本書紀』崇神天皇の卷全文の訓読。適宜、鼈頭に小見出しを附す。訓読は、前掲岩波文庫のそれをほぼ踏襲。

■平泉澄<sup>きよし</sup>校訂

『大日本文庫 國史篇 日本書紀』

春陽堂、昭和9年12月25日発行

新訂増補国史大系本を本として、岩波文庫本などを参考に『日本書紀』全三十巻について読み下し文と頭注を附したものの。

■大倉精神文化研究所編

『神典』

大倉精神文化研究所、昭和11年2月11日発行

『日本書紀』全三十巻のほぼ全文の読み下し文を掲げる（雄略天皇紀・武烈天皇紀に一部抄略あり）。『古事記』『古語拾遺』『新撰姓氏録』などを併載。卷末に「神典索引」として同書所収の古典全部の周到な索引を附す。なお、昭和13年刊行の大倉精神文化研究所編『神典解説』上卷（大倉精神文化研究所発行）には『日本書紀』の解説が収録されている。

■三教書院編輯部



『いてふ本日本書紀』上・中・下

三教書院、上は昭和11年5月7日、中は昭和11年11月25日、下は昭和12年6月17日

『日本書紀』ほぼ全巻の読み下し文を掲げる（武烈天皇紀に一部抄略あり）。（上）は巻第一～十、（中）は巻第十一～二十、（下）は巻第二十一～三十を収録。和装本。

■ 飯田季治

『日本書紀新講』上巻・中巻・下巻

明文社、三巻とも昭和11年10月15日発行

『日本書紀』全文の注釈書。飯田武郷校本による本文・正訓（読み下し文）・講（注釈）を施す。上巻には巻第一～巻第三、中巻には巻第四～巻第十四、下巻には巻第十五～三十を収録。

■ 植木直一郎訳

『現代語譯國文學全集 第一巻 古事記・日本書紀抄』

非凡閣、昭和11年10月20日発行

神代上下・神武・崇神・垂仁・景行・成務・仲哀・神功・応神・仁徳・欽明・推古・舒明天皇紀の抄訳。「序言」として植木氏による解題がある。

■ 中山久四郎なかやまきゆうしろう監修・宮下幸平著

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荆木）

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

『詳解日本書紀』上・下

芳文堂、上巻は昭和12年10月19日、下巻は昭和12年11月20日発行

上巻は神代巻、下巻は神武・崇神・垂仁・景行・神功・仁徳・欽明・推古の各天皇紀の重要箇所を抄出し、原文・読方・語釈・通釈の順で掲げる。

■ あけがらすびん  
暁烏敏

『神武天皇紀』古事記  
日本書紀

香草舎、昭和13年7月10日発行

『古事記』中巻の神武天皇段・『日本書紀』巻第三を読み下したものだ。「はしがき」によれば、前掲『神典』によったとある。

■ ひじやりようじろう  
泥谷良次郎編

『原典』  
『列記』日本神代傳集成

日本神代傳集成刊行所、昭和13年11月3日発行

神代・神武天皇について、『日本書紀』の本文を標準とし、『古事記』『古語拾遺』『先代旧事本紀』の関係記事を掲げ、さらに關聯史料として『新撰姓氏録』の記事などを附す。複数の先行テキストを用いて読み下し文のみ掲出。

■ 官幣大社 橿原神宮社務所

『神武天皇御紀謹解』

三秀舎、昭和15年1月15日発行

皇紀二千六百年にあたり、『日本書紀』巻第三、すなわち神武天皇紀の読み下し文・語釈・大意を掲げたもの。和装本。附録として「神武天皇を奉祀せる神社」、巻末に索引を附す。凡例に「本書は内務省神社局考證竝に指導課に於て謹纂したものである」とあり、左に掲げる内務省神社局編『神武天皇御紀謹解』と題字・凡例・奥付・判型以外は同じもの。和装本。

■内務省神社局編

『神武天皇御紀謹解』

内務省印刷局、昭和15年5月18日発行

皇紀二千六百年にあたり、『日本書紀』巻第三、すなわち神武天皇紀の読み下し文・語釈・大意を掲げたもの。附録として「神武天皇を奉祀せる神社」、巻末に索引を附す。前掲官幣大社樞原神宮社務所『神武天皇御紀謹解』とほぼ同じだが、こちらのほうが判型はやや小さい。

■佐伯有義校訂・標注

『増補六國史』巻壹日本書紀上・巻貳日本書紀下

朝日新聞社、巻壹昭和15年3月22日・巻貳昭和15年5月20日発行

巻壹は寛文版本を底本とする『日本書紀』校訂本のうち、巻第十五までを収録。頭注を附す。巻貳は巻十六から三十まで

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)  
を収録。のち、昭和57年7月15日に名著普及会より合本して復刻。

■内務省神祇院訳

「神武天皇御紀 日本書紀卷第三」(一)～(五)

東亞教育協會『興亞教育』第二卷第七・八・九・十・十一号に連載、昭和18年7月11日～11月1日発行  
上段に『日本書紀』卷第三の読み下し文を掲げ、下段にその注解を附す。神武天皇紀のみだが、詳細な注釈を施す。

■田邊勝哉著

『日本書紀神代卷新釋』

明世社、昭和18年6月28日発行

『日本書紀』神代卷上下について、前掲敷田年治『日本紀標註』全二十六卷・飯田武郷『日本書紀通釋』・鈴木重胤『日本書紀傳』によりつつ、田邊氏自身が古写本その他によつて校合を加えた原文を掲げ、ついで訓読・校異・釈義の順で排列する。

■平林治徳・沼津龍雄・島津久基・宮崎晴美共編

『國典大綱 神典篇』

明治書院、昭和18年10月30日発行

『日本書紀』神代卷・神武天皇紀を適宜読み下したもの。

■ 武田祐吉校注

『日本古典全書 日本書紀』全六卷

朝日新聞社、一は昭和23年1月30日、二は昭和28年6月20日、三は昭和29年10月20日、四は昭和30年12月30日、五は昭和31年12月10日、六は昭和32年6月30日発行

『日本書紀』全巻について、北野神社本を底本（欠本については彰考館本などを採用）とした原文とその校異・読み下し文・頭注を附したものの。六分冊からなり、一は巻第一・二、二は巻第三・九、三は巻第十・十六、四は巻第十七・二十三、五は巻第二十四・二十七、六は巻第二十八・三十を収録。

■ 國史大系編修會編

『新訂國史大系 日本書紀』前篇・後篇  
増補さかえ國史大系

吉川弘文館、前篇は昭和26年9月1日、後篇は昭和27年12月25日発行

寛文版本を底本とする『日本書紀』全文の校訂本。前篇は巻第一・十五、後篇は巻十六・三十までを収録。のちに完成記念版（前篇は昭和41年12月30日、後篇は昭和42年2月28日刊行）、ついで新装版（前篇は前篇平成12年4月20日、後篇は平成12年8月20日刊行）が出版されている。なお、『国史大系書目解題』下巻（吉川弘文館、平成13年11月1日）掲載の「増補新訂国史大系校訂分担者一覧」によれば、前篇・後篇の校訂者はともに丸山二郎・土井弘・井上薫の三氏。

■ 佐佐木信綱・久松潜一・竹田復さかえ監修

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

『日本書紀』(上)(中)(下)

いてふ本刊行會、(上)は昭和28年9月10日、(中)は昭和28年9月20日、(下)は昭和28年9月10日発行

『日本書紀』ほぼ全巻の読み下し文を掲げる(武烈天皇紀に一部抄略あり)。(上)は巻第一～十、(中)は巻第十一～二十、

(下)は巻第二十一～三十を収録。前掲『いてふ本日本書紀』上・中・下の洋装復刊。巻頭の「いてふ本刊行の言葉」によれば「いてふ本を土臺として」「厳密なる補校を加へ」たとあるが、顕著な内容の違いは認められない。

### ■三品彰英著

『日本書紀朝鮮関係記事考證』上巻・下巻

上巻は昭和37年11月10日に吉川弘文館より発行、下巻は上巻の第二版第一刷とともに天山舎より平成14年12月19日発行

『日本書紀』の朝鮮関係記事の原文と校異を前掲國史大系編修會編『増訂國史大系 日本書紀』前篇・後篇により掲げ、詳細な注釈を施したもの。上巻は崇神天皇紀から応神天皇紀まで、下巻は仁徳天皇紀から欽明天皇紀までを扱う。下巻の原稿は昭和46年8月に出来ていたようだが、諸般の事情で下巻は吉川弘文館からは刊行されることはなかった。なお、天山舎版の上巻では吉川弘文館版にあった「三品彰英略年譜」「三品彰英先生著作目録」が省かれている。

### ■丸山林平編

『定本日本書紀』上巻、中巻、下巻、辞典・索引

講談社、4巻とも昭和41年6月30日発行

『日本書紀』全文の原文(底本は寛文版本)とその校異・読み下し文を掲げたもの。とくに校異については各巻の巻末に

「別記」として詳細な諸本の異同を掲載する。上巻は巻第一～九、中巻は巻第十～二十一、下巻は巻第二十二～三十を収録。辞典・索引の巻は、主要用語を五十音順に排列したもので、索引と用語解を兼ねる。本編は各巻五百頁を超える大冊。

■坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋すずむ校注

『日本古典文学大系 67・68 日本書紀』上・下

岩波書店、上昭和42年3月31日・下昭和40年7月5日発行

『日本書紀』全文の原文とその校異・読み下し文・注釈。上には巻第一～十五、下には巻第十六～三十を収録。上巻には詳細な解説がある。のちに五分冊に再構成して岩波文庫に収録。

■井上光貞責任編集、川副武胤かわぞえ たけたね・佐伯有清・笹山晴生訳

『日本の名著 1 日本書紀』

中央公論社、昭和45年12月20日発行

『日本書紀』全三十巻の現代語訳（巻第四・十五～二十一・巻第二十六・巻第三十は省略）と補注からなる。井上光貞『日本書紀』の成立と解釈の歴史』『日本書紀』年表』を附す。

■田中卓たかし

「神功皇后を中心とした日本紀・古事記の編年対照史料」

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

神功皇后論文集刊行会編『神功皇后』（皇學館大学出版部、昭和47年5月発行）所収  
仲哀天皇（一部）・神功皇后・応神天皇（一部）にみえる神功皇后関係の『古事記』『日本書紀』の記事を上下対照に排列したものの。底本は前掲坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系67 日本書紀』上。のち『田中卓著作集 第十巻 古典籍と史料』（国書刊行会、平成5年8月30日）に再録。

■ 國學院大學日本文化研究所編

『校本日本書紀』一～四

角川書店、一は昭和48年2月、二は昭和50年12月20日、三は平成元年4月10日、四は平成7年5月31日発行  
『日本書紀』神代巻の校訂本。寛文板本を底本として、諸本によって対校を加え、その校異を詳細に掲出したもの。

■ 福永武彦訳

『日本古典文庫1 古事記・日本書紀』

河出書房新社、昭和51年2月25日発行

『古事記』『日本書紀』の抄訳。『日本書紀』については、前掲『國文六國史』や『日本古典全書 日本書紀』をテキストとして口訳したもの。歌謡についてはべつに「歌謡略注」があり、巻末に「解説」を附す。のち、『古事記』と『日本書紀』を別々に河出文庫に収録。

■ 直木孝次郎・西宮一民・岡田精司編



『鑑賞 日本古典文学第二巻 日本書紀・風土記』

角川書店、昭和52年5月10日発行

『日本書紀』の読みどころについて、「本文鑑賞」として読み下し文・注・口訳・解説を施す。全文ではないが、ほぼ各巻からあまねく抜粹している。巻頭に「総説」として直木孝次郎氏による解説があるほか、巻末に小島憲之「『日本書紀』の「ヨミ」に関して」など論考数篇を掲載。

■ 中村啓信・菅野雅雄編

『日本神話』

桜楓社、昭和53年3月20日発行

『古事記』上巻の読み下し文とそのままになる原文（真福寺本）を掲げ、それに対応する『日本書紀』の記事も併載するが、部分的な引用・掲出に留まる（一部は「付録」として別掲）。頭注のほか、「解説」「日本神話参考論文解説」「神名索引」あり。

■ 築島裕・石塚晴通著

『東洋文庫蔵岩崎本日本書紀 本文と索引』

貴重本刊行会、昭和53年11月20日発行

『日本書紀』巻二十二・二十四の古写本である岩崎本について、訓点をふくむ本文を忠実に鵜刻したもの。周到な索引を附す。

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荆木）

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

■ 原田敏明編

『古事記と日本書紀との比較』

大和書房、昭和53年11月28日発行

同書前編の原田敏明・池山聰助共編「紀記対照表」は、前掲國史大系編修會編『新訂國史大系 日本書紀』前篇と同じく増補國史大系本の『古事記』により、『日本書紀』正文を二十七節にわけ、それに対応する一書と『古事記』の原文を対照できるように下段に排列したものである。後編には、関聯する原田・池山・望月一憲・西川順土諸氏の研究論文を収録。にしかあまたみ

■ 石塚晴通

『圖書寮本日本書紀 本文篇』

美季出版社、昭和55年3月31日発行

宮内庁書陵部所蔵の『日本書紀』をできるかぎり原本に忠実に鰾刻したものである。卷第十二・卷第十四・卷第十五・卷第二十―二十四と卷第十と卷第二(排列順)を収録。ほかに、『圖書寮本日本書紀 索引篇』(美季出版社、昭和56年2月28日)・『圖書寮本日本書紀 本文篇』(美季出版社、昭和59年2月25日)も刊行されている。ちなみに、この圖書寮本については、のちに八木書店から宮内庁書陵部本影印集成『日本書紀』1～4(平成17年12月15日～同18年9月30日)として写真版が出版されている。

■ 浜田清次

『壬申紀私注』上巻・下巻

桜楓社、上巻昭和56年11月10日、下巻昭和58年5月25日発行  
天武天皇紀上について、読み下し文とその解説を施したもの。

■ 田中卓

「日本紀の天武天皇元年紀の改訂本」

『田中卓著作集 第五巻 壬申の乱とその前後』（国書刊行会、昭和60年9月15日発行）所収

壬申の乱研究の基本史料である巻第二十八を読みやすく「改訂」したもの。底本は、前掲佐伯有義校訂・標注『増補六國史』巻貳日本書紀下・國史大系編修會編『新訂國史大系 日本書紀』後篇・坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系68 日本書紀』下によっている。

■ 宇治谷 孟  
うじたに ぼつとむ

『全訳―現代文 日本書紀』上巻・下巻

創芸出版、上巻は昭和61年1月1日、下巻は昭和61年3月1日発行

『日本書紀』全文の現代語訳。原文はなし。のち改訂して講談社学術文庫に収録。

■ 井上光貞監訳

『日本書紀』上・下

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

中央公論社、上巻昭和62年3月25日・下巻昭和62年11月20日発行

『日本書紀』全巻の現代語訳。総説・注・校訂本と詳細な校異を附す。上巻には巻第一～十六、下巻には巻第十七～三十を収録。上巻の現代語訳は川副武胤・佐伯有清両氏、下巻のそれは笹山晴生氏の担当、原文は林勉氏が担当。のち現代語訳のみ三分冊で中公クラシックスに収録。

■ 眞殿<sup>まどの</sup>皎<sup>こう</sup>訳

『日本書紀』上

入木山房、昭和62年6月10日発行

『日本書紀』巻第一～九までの現代語訳。原文は添えられていない。凡例等がなく、底本も不明。下巻は未刊。

■ 宇治谷孟

『全現代語訳日本書紀』(上) (下)

講談社、(上)は昭和63年6月6日、(下)は昭和63年8月4日発行

前掲『全訳―現代文 日本書紀』上巻・下巻を改訂して文庫化したもの。

■ 山田宗睦訳

『原本現代訳 日本書紀』(上) (中) (下)

教育社(のちニュートンプレス社)、平成4年3月10日発行

『日本書紀』全文の現代語訳。(上)は巻第一～十、(中)は巻十一～二十二、(下)は巻二十三～三十の現代語訳を収録。各頁下に簡単な注を附す。

■小島憲之・西宮一民・毛利正守・直木孝次郎・藏中進校注・訳

『新編日本古典文学全集 日本書紀』①～③

小学館、①は平成6年4月10日、②は平成8年10月10日、③は平成10年6月20日発行

『日本書紀』全巻の原文・現代語訳・注・読み下し文・校訂付記を掲載する。上巻の巻末には、詳細な解説と参考文献・日本書紀年表があり、各巻には「神名・人名・地名索引」も附す。

■坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注

『日本書紀』全5巻

岩波書店、(一)は平成6年9月17日、(二)は平成6年10月17日、(三)は平成6年12月16日、(四)は平成7年2月16日、(五)は平成7年3月16日発行

前掲坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系67・68 日本書紀』上・下を五分冊で文庫化したもの。第一冊には巻第一～五、第二冊には巻第六～十三、第三冊には巻第十四～十九、第四冊には巻第二十～二十六、第五冊には巻第二十七～三十を収録。

■三橋健

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

『神典日本書紀』

いけがや書房、平成8年4月1日発行

『日本書紀』のうち、神道にかかわりの深い箇所を抜萃し、その読み下し文を前掲坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系67・68 日本書紀』上・下によって掲げたもの。原文はなし。「本文篇」につづき、「解説篇」として「神典としての『日本書紀』」、「年表篇」として『日本書紀』神道関係年表」を併載。

■ 山田宗睦著

『日本書紀史注』巻第一～巻第四(既刊四冊)

風人社、平成9年2月15日～同11年2月15日発行

『日本書紀』各巻の注釈書。前掲坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系67・68 日本書紀』上・下にもとづく原文を掲げ、ついで試訓・注釈を掲げる。第1巻が『日本書紀』巻第一、第2巻が巻第二、第3巻が巻第三、第4巻が巻第四で、全三十巻の予定だが未完。

■ 角林文雄著

『日本書紀』神代巻全注釈

塙書房、平成11年3月17日発行

兼方本『日本書紀』神代巻を底本とし、現代語訳・原文・注釈・考察の順で解釈を施す。

■井上光貞監訳、川副武胤・佐伯有清・笹山晴生訳

『日本書紀』 I・II・III

中央公論社、Iは平成15年8月10日、IIは平成5年9月10日、IIIは平成15年10月10日発行

前掲井上光貞監訳『日本書紀』上・下から現代語訳のみを抽出したもの。Iは巻第一～九（川副武胤・佐伯有清訳）、IIは巻第十～二十一（佐伯有清・笹山晴生訳）、IIIは巻第二十二～三十（笹山晴生訳）の現代語訳をそれぞれ収録。新たに各巻に「解題」を附す。

■福永武彦訳

『現代語訳 日本書紀』

河出書房新社、平成17年10月5日発行

前掲『日本古典文庫1 古事記・日本書紀』の『日本書紀』の部分を抜粋し、文庫として刊行したもの。

■小島憲之・西宮一民・毛利正守・直木孝次郎・蔵中進訳

『日本の古典を読む2・3 日本書紀』上・下

小学館、ともに平成19年9月25日発行

『新編日本古典文学全集日本書紀』①～③の現代語訳部分を抄出したもの。原文はない。

■宮澤豊穂<sup>とよほ</sup>

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荆木）

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

『日本書紀 全訳』

ほおずき書籍 平成21年9月10日発行

前掲國史大系編修會編『増訂國史大系 日本書紀』前篇・後篇を底本とした『日本書紀』全巻の現代語訳。適宜小見出しを附す。アマゾンジャパン合同会社からKindle(電子書籍)版も公開。

■ 皇學館大学記紀研究会・富山県神社庁教化委員会教学部会共編

『日本書紀(神代卷)を読む―富山に祀られる神々―』

皇學館大学記紀研究会・富山県神社庁教化委員会教学部会、平成21年8月20日発行

『日本書紀』巻第一・二と『古事記』上巻について、現代語訳と注釈を施したもの。現代語訳のみで原文はなし。非売品。

■ すがの菅野雅雄訳

『現代語訳 日本書紀【抄訳】』

KADOKAWA/中経出版、平成26年9月8日発行

『日本書紀』全巻の抄訳。前掲坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系67・68 日本書紀』上・下の読み下し文をもとに各巻の読みどころを現代語訳で示し、注を附したもの。巻頭に菅野氏による「日本古代史と『日本書紀』の成立」が掲げられている。



■ 相原清次

『解析』『日本書紀』 凶版と口語訳による『書紀』への招待』

彩流社、平成29年7月3日発行

第Ⅰ部「『日本書紀』の書物としての創られ方」と第Ⅱ部「『日本書紀』 口語訳と注解」とからなり、第Ⅱ部に『日本書紀』の口訳と注解を収める。ただし、巻第三以降に一部省略があり、また、歌謡の口訳は省略される。

〔附記〕

櫻園書院刊行の『日本紀神代卷』上・下全二冊（二冊四十錢）は明治のころの出版だが、刊記がないので、便宜上ここに参考として書名をあげるに留める。

【歌謡の注釈】

■ 佐佐木信綱著

『日本歌選 上古之巻』

博文館、明治42年3月8日発行

「上古の歌謡」に「古事記日本紀所載」として、記紀歌謡の読み下しを上段に『古事記』、下段に『日本書紀』を対比・排列。巻末に「上世歌謡の概観」として解題を附す。

■ 野村八良校訂

はちろう

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

『有朋堂文庫 古代歌謡集』

有朋堂書店、大正7年7月4日発行

神楽歌・催馬楽などとともに、林諸鳥『紀記歌集』（天明8年刊）を採用し、あわせて先行研究によって頭注を施す。

■ 太田水穂著

『紀記歌集講義 附録上代歌謡解』

洛陽堂、大正11年9月10日発行

記紀の歌謡を時代順に排列し、原文・読み下し・注解を施す。「附録」は、『続日本紀』『日本後紀』など、記紀以外の古代歌謡の注解。大正15年2月12日に共立社より再刊。

■ 植松安<sup>やすし</sup>著

『記紀の歌の新釋』

大同館書店、大正12年3月10日発行

記紀の歌謡について、頭注の形で原文を掲げ、本文で読み下し・語釈・大意・評言を掲げる。

■ 武田祐吉編

『續萬葉集』

古今書院、大正15年5月14日発行

記紀の歌謡を雑歌・相聞・挽歌などに分類し、時代順に排列。原文・読み下し・訳を掲げる。巻末に「書物別歌謡索引」  
「作者別歌謡索引」「歌謡初句索引」を附す。

■ 兒山信一著

『水甕歌書叢刊第十二篇 上代歌謡集』

水甕社、昭和4年8月1日発行

『萬葉集』以外の古代歌謡を集成。上段に読み下し、下段に原文を掲げる。

■ 遠藤佐市郎・藤田徳太郎編

『上代歌文新抄』

中興館、昭和4年11月9日発行

第一篇「歌謡」で萬葉歌とともに、『日本書紀』歌謡を原文で引き、訓みを附す。

■ 國民圖書會社編輯

『校註國歌大系第一卷 古歌謡集』

國民圖書會社、昭和6年3月23日発行

林諸鳥『紀記歌集』（天明8年刊）を収録し、頭注を附す。本巻の担当は佐伯常麿。昭和10年7月15日に誠文堂新光社より普及版が、昭和51年10月10日には講談社より復刻版が刊行されている。

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

■編輯兼發行人山本三生

『短歌講座 第五卷 撰集講義篇』

改造社、昭和7年2月20日發行

森本吉治「記紀歌集講義」を収録。記紀歌語についての総説、数首の歌語について読み下し・歌意・語釈・餘釈を掲げる。

■松岡静雄著

『紀記論究外篇 古代歌謡』上巻・下巻

同文館、昭和7年9月20日發行

記紀歌謡の原文・読み下し・用語解・大意を掲げる。のち昭和61年2月10日に教育出版センターより復刻版が刊行されている。

■次田潤編

『上代文學選集』

明治書院、昭和7年12月5日發行

主要な記紀歌謡の読み下しとかなたんな頭注を掲げる。べつに『日本書紀』本文についても一部掲載。「緒言」によれば、歌謡は前掲佐佐木信綱『日本歌選 上古之卷』により、本文については前掲佐伯有義校訂の『六國史』を基としたと

ある。昭和16年2月5日に修正十七版刊行。

■ 武田祐吉校註

『記紀歌謡集』

岩波書店、昭和8年10月30日発行

岩波文庫の一冊。記紀歌謡について、原文・読み下しとかなたんな脚注を掲げる。初句索引・作者索引を附す。

■ 森敬三著

『上代名歌評釈』

大倉廣文堂、昭和10年7月15日発行

「古事記の名歌」「日本書紀の名歌」「萬葉集の名歌」の順で、読み下し・原文・語釈・歌意・評を掲げる。

■ 窪田空穂校閲・谷馨著

『歴代名歌評釋 記紀・萬葉篇』

交蘭社、昭和11年12月13日発行

第一篇「記紀歌謡」を「一、記紀歌謡概説」「二、記紀歌謡評釈」に分け、後者では読み下し・評釈・口訳・評言を記す。

■ 相磯貞三著

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荆木）

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

『記紀解釈新解』

厚生閣、昭和14年4月20日発行

記紀歌謡の原文・読み下し・題意・口訳・語釈・考説を収める。巻末に「記紀歌謡初句索引」「記紀歌謡作者索引」を附す。

■ 中村富次郎著

『古事記日本書紀の歌』

月明會出版部、昭和17年6月15日発行

古事記の部・日本書紀の部に分けて、さらに神代に始まり、歴代天皇朝ごとに歌謡の原文・読み下し・注釈を掲げる。

■ 平林治徳・沼津龍雄・島津久基・宮崎晴美共編

『國典大綱 和歌篇』

明治書院、昭和17年7月27日発行

第一篇「御歴代御製並びに皇后の御歌」・第二篇「上代の和歌」において、『日本書紀』などが記す歌謡のおもなものを適宜読み下す。

■ 佐佐木信綱著

『上代歌謡の研究』

人文書院、昭和21年10月1日発行

とくに断りはないが、前掲『日本歌選 上古之巻』の改訂版とみられる。「上代の歌謡」に「古事記日本紀所載」として、記紀歌謡の読み下しを上段に『古事記』、下段に『日本書紀』を対比・排列。巻末に「上世歌謡の概観」として解題を附す。

■ 賀古明かこあきら 編纂

『日本文學新集 古代歌謡篇』

互陽堂、昭和31年4月20日発行

記紀歌謡・古代歌謡拾遺・万葉集に分類し、歌謡の読み下しを掲げ、頭注を附す。

■ 武田祐吉 著

『記紀歌謡集全講』

明治書院、昭和31年5月20日発行

記紀歌謡の原文と校異・読み下し・訳・釈・評を収める。

■ 土橋寛・小西甚一 校注

『日本古典文学大系3 古代歌謡集』

岩波書店、昭和32年7月5日発行

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荆木)

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

『日本書紀』の歌謡について、原文・読み下し文・頭注を附す。古事記歌謡・続日本紀歌謡・風土記歌謡・仏足石歌とともに収録。日本書紀歌謡は土橋氏の担当。

■ 武田祐吉編

『日本古典鑑賞講座 第二卷 古事記・風土記・記紀歌謡』

角川書店、昭和32年8月10日発行

記紀歌謡の主要なものについて、読み下し・口訳・解説を施したもの。『古事記』・風土記と併載。記紀歌謡の担当は武田氏。

■ 石川淳・倉野憲司・福永武彦訳

『古典日本文学全集1 古事記 日本霊異記 風土記 古代歌謡』

筑摩書房、昭和35年5月4日発行

「古代歌謡」（福永武彦訳）の一部として日本書紀歌謡の現代語訳を収録。解説に小島憲之「古代歌謡」を掲載する。

■ 相磯貞三著

『記紀解釈全註解』

有精堂出版、昭和37年6月20日発行

記紀歌謡の原文・読み下し・題意・口訳・語釈・考説を収める。前掲相磯氏『記紀解釈新解』に『記紀歌謡論』（昭和35年



6月)を増補したものの。

■ 森本治吉・竹内金治郎・大久保正編

『上代歌謡』

桜楓社、昭和39年4月10日発行

『日本書紀』歌謡の読み下しと頭注を掲げる。

■ 高木市之助校註

『上代歌謡集』

朝日新聞社、昭和42年5月30日発行

記紀歌謡の原文・読み下し・大意・頭注。のち昭和52年5月1日におなじく朝日新聞社から日本古典選の一冊として復刊。

■ 堀内民一(文)・葛西宗誠(写真)

『古代歌謡の旅』

淡交新社、昭和43年2月11日発行

「古事記の歌」「日本書紀の歌」に分け、主要な記紀歌謡の読み下しとかんたんな脚注を関聯写真とともに掲出。

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

■ 益田勝美著

『日本詩人選1 記紀歌謡』

筑摩書房、昭和47年5月25日発行

厳密な意味での注釈ではないが、かなりの数の記紀歌謡について、現代語訳を交えつつ解説。

■ 山路平四郎著

『記紀歌謡評釈』

東京堂出版、昭和48年9月20日発行

記紀歌謡の読み下し・口語訳・語釈・評を収める。

■ 荻原浅男・鴻巣隼雄校注・訳

『日本古典文学全集1 古事記 上代歌謡』

小学館、昭和48年11月5日発行

『日本書紀』歌謡の注釈と現代語訳。歌謡の担当は鴻巣隼雄氏。

■ 土橋寛・池田弥三郎編

『鑑賞日本古典文学 第4巻 歌謡I 記紀歌謡 神楽歌・催馬楽』

角川書店、昭和50年5月30日発行

記紀歌謡の読み下しと注釈。記紀歌謡は土橋寛氏担当。

■ 山路平四郎・窪田章一郎編

『記紀歌謡』

早稲田大学出版部、昭和51年4月20日発行

記紀歌謡の読み下しを掲げ、解説を加えたもの。巻末に詳細な「主要参考文献解題・目録」を附す。

■ つちはしめたか  
土橋寛著

『古代歌謡全注釈 日本書紀編』

角川書店、昭和51年8月31日発行

「日本古典評釈 全注釈叢書」の一冊として刊行されたもの。『日本書紀』歌謡について、原文・読み下し・口訳・考説を施す。原文の底本は日本古典文学大系の『日本書紀』を採用し、校異も掲げる。巻末には「歌謡語彙総索引」「主要語釈・事項索引」を附す。『日本書紀』歌謡の注釈書としてはもっとも詳細なものである。

■ 大久保正訳注

『日本書紀歌謡全訳注』

講談社、昭和56年8月10日発行

講談社学術文庫の一冊。『日本書紀』歌謡について、読み下し・現代語訳・語釈・解説を施す。

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―(荊木)

『日本書紀』のテキストと注釈書―明治以降を中心に―（荊木）

■ 山田實著

『新讀日本書紀歌謡及び訓注』

かわち印刷会社、平成4年11月24日製本（私家版）

『日本書紀』の歌謡及び訓註について、当時の発音形を推定し、新読を施したもの。語彙索引を附す。

■ 大久間喜一郎・居駒永幸編

『日本書紀【歌】全注釈』

笠間書院、平成20年4月1日発行

『日本書紀』にみえる歌謡全百二十八首と前後の文について注釈を加えたもの。

Textbooks for the *Nihon shoki* and Annotations: Focusing on the Period since 1868

Yoshiyuki IBARAKI

Abstract

The *Nihon shoki* is the oldest official history of Japan, covering events from the mythical age of the gods up to the period of Empress Jitō. It is composed of 30 volumes plus one volume of genealogical charts. The project of making the *Nihon shoki* was begun in the 10th year of the reign of Tenmu (681), and it was completed in 720.

The *Nihon shoki* has been read and studied widely by many people. They have added notes to it and made annotated books. From 1868, a lot of the *Nihon shoki's* textbooks with annotations were published. The number of them is no less than 100. In this paper, I try to make a list and use them to consider the modern study of the *Nihon shoki*.

Keywords: *Nihon shoki*; mythical age; revised textbooks; annotations of the *Kojiki*